

新資料紹介

京都女子大学蔵「何草百韻」

——專順を中心として——

斎藤義光

解題

横軸一卷の物で、桐の箱に納められており、蓋裏に下記のような極書きに類する記載があるが、もちろん真偽のほどは後に述べるように定かでない。軸物の体裁は、223糎×27糎。墨付は約194糎で、巻頭の余白約15糎は、紺薄地に金泥があしらわれている。巻末に約24糎の空白がある。鳥の子紙に各面平均10行書き。継ぎ目が懷紙の原則に合っていないことから、懷紙から書写し、袋綴であったものを、さらに軸物に改装したものと思われる。

連歌師
心敬一巻
せにおぼふ(原)

端作りに「何草」とあるのみで、百韻の名称は明らかでない。賦物は発句の内容から、「月草」かと思われる。張行日も張行者名もないが、発句の中に詠まれている「月のかつら」、名ウ・7句の「長月の花」から、秋季の詠と思われる。

句挙には、連衆のうち、栄阿・重阿・僧阿・成阿の四名は記載されていない。詠句数も実数と一致していないものがある。

能阿十五(14) 原春五(3) 專順十(11)

源用十(9) 堯清八(9) 源阿七(4)

(一) 内が実数である。また作者名の脱落しているもの2句
ウ13 おもはぬを思ふ中たたちのむそよ

名ウ1 しるしらすちまたにすゝむ夕まくれ
がある。書写者については不明であるが、箱の蓋裏にある「心敬一巻」から、心敬筆を予想することはできる。次に、この「何草」百韻の表8句と、心敬筆と確認されている天理図書館蔵「連歌百句付」の巻頭の影印を対比して掲げてみた。しかし、御所本「ささめごと」の筆者について、木藤才蔵氏が部分的な相似を認めながらも、最終的には心敬筆でないと結論しておられる点^{注1}などから考えて、心敬の書にくわしい者の意図的に似せて書いたものではないかと思われる。

成立

百韻の内容は文末に翻刻として掲げた通りである。既に述べた通り、この百韻の張行された日時・場所等は直接記載からは知ることができない。ただ一座の連衆の中、主要な作家の没年を見ると、專順文明八・三・二〇(一四七六)、能阿文明三・八(一四七一)、行助文明一・三・二四(一四六九)であるので、少くとも行助自書の文明元年以前であることは確かである。さらに百韻中の名残り裏3句目の專順の付句は、專順の「連歌五百句」(一〇二)にも収められており、「新撰菟玖波集」には入集していないが、宗祇の「竹林抄」(二五二)にも収められている。專順の「連歌五百句」は、応仁元年(一四六七)

たゝにはきかし松かせの音

うらやまししつかにすめるみねの庵

山居の人は松風を心ありて聞なすらんと也

何榮

[illegible]

京都女子大學藏書

五五五

春のやうな
 あつたあつた
 くさくさ
 しつと
 あつたあつた
 くさくさ
 しつと
 あつたあつた
 くさくさ
 しつと

さゝめこと巻頭（御所本）

連秋百句

一、ちりしゆんじと五の素
 方わめふさなりたのあそび
 申の素のすきまに神
 世にむくをとりてつる
 かゝも望はるるけはなう
 言にあやふしむと下りわ
 冬おれをうらふと下りわ
 これと氣にいせと素の香
 赤いもすか脂の花あり
 おりたるもさみみの水
 神月もさみみの水の氷
 事をもさみみにありあり
 いにしへにありあり

連歌百句付卷頭（天理圖書館藏）

内容

「何草」百韻については、

木藤才藏氏「連歌史論考」

奥田勲氏「連歌作品年表稿」

赤瀬信吾氏「曼殊院連歌作品目録」

島津忠夫氏「大阪天満宮百韻一覽」

その他、専順研究にわしい石村雍子氏の諸論文等にも所見がない。また「何草」百韻中の作品についても、既にふれた専順の「うらやまし」の句以外の10句の専順の句についても、「竹林抄」「新撰菟玖波集」いずれにも採録されていない。また他の代表的作家である能阿の句の14句についても、唯一の自撰句集である「集百句之連歌」にも収められていない。

た。この百韻と関連して、一座し
た連衆が室町幕府の中枢に参画した
武將や公方同朋衆あるいは当時の宗
教界・政治の各方面でいろいろと重
要な動きをした時衆の代表的人物な
どで殆んど一致する他の百韻が二卷
存在するのである。そこでこれらの
百韻との関連を考えてみたい。

国文学研究資料館D分類一七四八
に七海氏旧蔵の「連歌巻物」(抄)が

ある。扉に広島大学の蔵書印のある紙焼で、明らかに福井久蔵文庫の一冊で、先生の手による七海本からの写しと思われる。広島大学文学部国語国文学研究室蔵の「福井文庫目録」に

195七海本連歌書控 福井久蔵

旧七海氏蔵連歌巻物についての控

とあるのが本書と思われる。内容は

園の塵 二卷

何船

賦山何連歌

朝何

賦何路 千句一

の4点である。「園の塵」には

上巻ハ類従本より抄出

下巻は雑書より

とあり、原本に対する福井先生の注記で、原文の転写は省略されたものと思われる。

「賦山何連歌」は

鶯に明ほのこす聲もかな 印孝

を発句とする表8句で、これは文明二年一月十日～十二日興行の河越千句の第四の表8句である。「賦山何連歌」の下に

文明二年比のものならん

とあるのは、七海本の内容でなく、福井先生の注記かと思われる。句

挙に

印孝七 永祥八 修茂八 宗祇三 道眞二 長敏二 心敬五 義藤

五

とあるのは必ずしも正確ではないが、河越千句第四の一部であることは間違いない。

「賦何路 千句一」

は、「美濃千句 第一何路」の

人やいつ春のとひくる宿の梅 専順

を発句とする、脇句・第三の、いわゆる三ッ物である。「美濃千句」

は、文明四年十二月十六日～二十一日の間、最後に専順が身を寄せた

美濃国斎藤妙椿の居城革手城で、折から応仁の乱を避けた宗祇をも迎

えて張行された、専順ゆかりの千句である。しかしこの二つの作品よ

りも、さらに本論の中心の「何草」百韻にかかわりの深いのは次の二

つの百韻である。

何船

松やしる花いくかへり宿の菊

庭のまさきのなこりかなしも

霧わたる高間の山に風おちて

こゆとやなきミねのかりかね

かへりみて都はとをくるゝ日に

たひの人とていそくゆくすゑ

よゝ時雨過るもまたぬ野をわけて

をちなる雲は雪やふるらん

朝何 心敬宅

した水にまつうつろひぬ秋の菊

千草にむすへ花のはつ霜

長月や野もせの露のさむき日に

山のはちかきあり明のそら

今朝まれハ又くろ衣のつらなりて

かへらんほとのとほきふるさと

雨のゝちいそきてゆかんだひころも

かせふきかはりあられふる也

(マ、)

ともに表8句を挙げた。両百韻ともに、当座の季題として菊を詠み込んでいること、「朝何」の第三句目に「長月」とあることから、秋九月の張行であると思われる。木藤才蔵氏の「連歌史論考」でも両百韻をその年表に、発句ならびに連衆名・詠句数をあげて示しておられる

が、その項に「文明元 三月廿四日この時以前に次の作品成立」としておられるのは、阿百韻に一座している行助が、この三月廿四日に自害していることから、このように推定されたものと思われる。奥田勲氏の「連歌作品年表稿」にも示しているように、阿百韻とも天理綿屋文庫「連歌卷子本集」中に含まれ、特に「朝何」については「伝心敬写」となっている。これは「何朝」百韻がその賦物の下に「心敬宅」と記しているのとかかわるものと思われる。「福井文庫目録」でも

35 伝心敬僧都筆 朝何連歌

した水に先うつろひぬ秋の□(堯清・忠珊・行助等)七海本(巻子)の写。

となっている。

さて「何草」と「何船」「朝何」三つの百韻の連衆名と詠句数を一覽表にしてみると次のようになる。()内の数字は、句挙に欠けていたものを、実作から補ったものである。なお同じ表に例示した「何人」百韻は、本論の後半で主要作家にふれる際の必要のために掲げたものである。

何人 寛正三年(一四六二)一月廿五日興行

発句 日は永御代のひかりに逢にけり 禪盛

連衆 専順以下十六名

右の四つの百韻の中、「何人」を除く他の三つの百韻の間にいくつかの共通する要素を指摘することができる。その中で最も特長的なこと

は、参加した連衆が、ともに15名・18名という百韻の一座としては人数に属する興行でありながら、三者に共通するのが14人、二者に共通するのが15人という共通する作者によって営まれたということである。このことから、いくつかのことがらを指摘することができるが、その第一は、興行の営まれた日時が、極めて近い期間に、時には連続的に催されたかもしれないということである。既に述べたように、「何草」は、「月のかつら」「長月の花」から、秋季の詠と思われる、「何船」「朝何」については、「宿の菊」「秋の菊」「長月」等から、やはり秋季の詠と考えられる。次に、いずれの百韻も、専門連歌師のみならず、いくつかの多様なグループの立場にある連衆を集め得ており、張行者の立場に在った者が、そのことを可能にする人物であったであろうことが想像される。さらに張行の場所についても、このような連歌会の開催を可能にする地域と場所であったと思われる。すなわち、地方の小都市や地方の武将の居城ではかなり興行の実施に無理があったと思われる。後文で主要作家にふれるが、そういう意味では、一座した中心的顔ぶれから京都及びそれに近い地域が考えられるのである。

さらに問題を、当時の連歌壇のいくつかのことがらとかかわらせて考えてみることにする。まず成立の時期については、行助その他の主要連歌師の没年並びに「専順五百句」の成立の応仁元年(一四六七)五月十日を下限としたが、その上限を考える一つの参考資料として

何人	朝何	何船	何草	百韻	
				連衆	順
8	12	12	11	専	順
10	15	14	14	能	阿
7	9	10	11	盛	家
1	4	4	(4)	栄	阿
	14	12	13	道	員
	7	3	3	覚	阿
	2	1	(3)	重	阿
	9	8	9	堯	清
	3	1	1	久	澄
	10	6	10	源	用
	4	2	4	忠	珊
	3	2	3	心	阿
	6	7	(3)	僧	阿
	1	1	(2)	成	円
		8	3	原	春
			4	源	阿
7	1	7		行	助
		1		親	忠
		1		久	広
9				賢	盛
他11人	15名	18名	16名		

「何人」百韻を掲げたのである。すなわちこの四つの百韻に共通して一座した作家のうち、当時一応名を成した専順・能阿・行助等は別として、他の盛家や栄阿をみると、その出句数が、「何人」が他の百韻よりはるかに少ないのである。一座した総人数は殆んど同数に近いので、その比率は大体同じと考えてよい。当時一

座の中での出句数については、身分の高い公家、上級武将のような特別な人物を除いては、長い間の経験と努力が必要とされた。そういう点から考えると、「何草」「何船」「何何」が、寛正三年（一四六二）よりも以前の作とは考えにくいのである。かりにこの時をこれら共通の要素を持つ三つの百韻の上限と考えた場合、制作年次はその間の約六、七年の間にしぼられると考えることが可能となるのである。

次に、「何草」「何船」「何何」の三つの百韻に共通することがらとして、当時の連歌壇の最上層のリーダーとしての立場に在る宗祇と心敬とが一座していないことである。当時の主たる座に殆んど姿を見せないことのない宗祇の欠席は、その時期、京での不在が予想される。

寛正六年（一四六五）正月十六日、「何人百韻」に心敬等とともに一座して在京、四月十六日には奈良大乗院の尋尊僧上を訪問して不在、十二月十四日には「何船百韻」に勝元・心敬等とともに一座している。翌寛正七年（文正元年・一四六六）正月十八日の「何人百韻」、二月四日の「何人百韻」には心敬・行助・専順等とともに一座しているが、二月の吉野花見の旅の後、五月の難波の住吉社参詣から続いて六月東国に下向、以後長い東国の旅の後応仁三年（文明元年・一四六九）七月上旬帰京するまでの約三年間都を不在にすることとなる。

次に、この三つの百韻に、心敬がいずれにも同座していないこと、そして、それにもかかわらずそのうちの「朝何」百韻が心敬宅で興行されているという事実の解釈である。このことについては、当時の代表的連歌指導者の、その影響範囲のあり方がとりあげられねばならない。このことについては、金子金治郎氏の洞察豊かな連歌界の分析がなされているが、能阿・行助・専順等が、早くから室町幕府近衆として中枢に参画する宗伊（賢盛）等を通じて將軍家連歌の会にかかわっていたのに対し、心敬はむしろ畠山・細川の両管領家にかかわる会に加わることが多かったのである。十住心院の毘沙門講の再興も、管領畠山政長の幕府への申し入れにより実現した事実によっても知られることができる。

「親元日記」寛正六年の条

○六月三日 十住心院毘沙門講、御剣御馬事、任例可被_レ下之旨、管領へ御申之由、以_レ備州_一御披露之、仍御太刀保弘御馬_{黒印雀}被_レ遣、神保四郎右衛門参之、即親元渡_{此兩種一}畢

○六月五日 十住心院心敬、一昨日御剣御馬、申_{御沙汰}、為_{御礼}被_レ参之、備州江可_二申入_一之由、被_レ申之。

これらの日記によってこの間の事情を知ることができる。「何草」「何船」「何何」の百韻に心敬が一座しなかった理由も、之等の百韻に一座した連衆が幕府寄りの作者達の座であったことから推察できる。

しかし「朝何」百韻が心敬宅で張行されたことについては一考を要するであろう。このことについての明瞭な理由は知り得ないが、一つには、連歌が座の文芸であることによって、それぞれの立場の作者達の交流を必然的に必要としたこと、地下出身の連歌師達の間には、無言のうちの相互依存の意識が働いていたであろうこと、特にこの百韻の場合、宗匠格であった専順の、心敬への温厚で心配りのある配慮があったであろうこと、再興なる十住心院への祝意などもあったであろうことが想像できる。以上述べた諸点から、確定的な資料を欠きつつも、之等三つの百韻が、文正元年（一四六六）六月、宗祇の関東下向以後、応仁元年（一四六七）四月二十八日、心敬が関東下向のため京を離れるまでの間に成ったであろうことが推定される。

主要作者

「何草」百韻の性格を考える上で重要と思われる作者、特に、室町幕府の中枢に参画した武将としての道員・盛家、公方同朋としてこれも裏面で働きかけた栄阿・原春、時衆の中心的存在であった覚阿について調べ得たことを述べる。

覚阿

覚阿については、金子金治郎氏がかなり詳細な閥歴を紹介しておられるので、やや長文であるが引用させていただく_{注4}。

この百韻（応仁二年・「何人」）に七句（天満本八句）の出句は中

堅の作者、文明五年(実は応仁元年か)十二月五日心敬発句「何路」百韻にも一座している。この覚阿が、文明七年十一月廿六日の因幡千句の第二百韻発句の覚阿(木藤才藏氏『連歌史論考・下』年表)に成長したとすれば、有力な連歌師で、『新撰菟玖波集』に二句入集の覚阿であるかも知れない。同集作者部類では現存衆で、「越前時衆」(青山本外)と注されており、伝宗鑑筆本には「越後」とある。越前(越後)の時衆が、ここに登場しても不思議はない。藤沢にある時宗本山の清浄光寺(遊行寺)には、この時期に宗祇も参詣して連歌しており、『萱草』発句)会同の縁は、いくらかもある。なおこの百韻には、銭阿(俊阿)、初阿(兼阿)の時衆も参加している。覚阿が先達であろう。

時衆の僧と連歌との関係について既に論ぜられているが、右の金子氏の論文中有る越前の覚阿については、朝倉政権の成立と深い関係にあった本願寺教団の中心僧と考えることは十分に可能である。中世後期において、各地で時衆教団が政治的・経済的に有力な動きをしたことは既に明らかであるが、越前においても、文明三年七月の蓮如の吉崎入りを契機として教団の飛躍的發展と朝倉政権の安定が同時に進行するわけである。^{注5}このような情勢の中で、文正・応仁の交と推定される時期に、幕府の武將や公方同朋衆と一座する百韻で3ゝ7句出句し得た覚阿が、右に述べた覚阿と同一人物視することにそれほど無理はないように思われる。以下に覚阿に関する主な資料を掲げる。

○「何人」百韻 応仁二年冬(一四六八)

品川・鈴木長敏邸藏

発句 雪の折る萱が末葉は道もなし 心敬

心敬19 宗祇16 覚阿8 他8人

○「何路」百韻 文明五年十二月五日(一四七三)

発句 雪の影ぬれずは花のあらしかな 心敬

心敬 宗悦 覚阿 他8人(「弘文莊書目」七号)

○「因幡千句」第二百韻「何人」 文明七年十一月十六日(一四七五)

発句 見るたびに初雪なれや庭の松 覚阿
因みに第一百韻の発句は専順、また各巻の覚阿の出句数は次の通りである。

第一(四) 第二(二) 第三(二) 第四(三) 第五(六) 第六(五)
第七(二) 第八(二) 第九(二) 第十(六)

○「新撰菟玖波集」入集句

おもふもかなし行末のあき

さやかなる月より西のよ半の空 (秋上)

よそめそ思ふ中をへたつる

山さくらたつねてみれば雲もなし (雑)

右の覚阿の他に、和泉・堺の金光寺の覚阿

「何路」(永正十二年十一月十日―一五一五)

「何人」(永正十五年三月十五日―一五一八)

「何船」(大永三年一月九日―一五二三)

また越前一乗谷浄土寺の覚阿、

「一乗谷曲水宴詩歌」(永禄五年八月二十一日―一五六二)

「連歌会」(永禄十二年六月十三日―一五六九)

さらに永徳二年一月二十二日(一三八二)、太宰府で今川了俊千句に一座した覚阿など同名の人物が居るが、いずれも年代その他の点から別人と考えられる。

道員

道員については資料は多く見られない。

「何人」百韻(享徳三年一月―一四五四・岡田柿衛本)

発句 梅はこの花の手向の初めかな 氏栄

脇 いつ旅だちて春はきぬらん 宗砌

氏栄・宗砌・日晟・道員 他4人

宗砌が当時連歌壇の第一人者であったことはいうまでもないが、一座した連衆の中の日晟にかかわり深い武將と思われる。京都の山名教之家臣で、宗砌が但馬山名家の家臣であったことから、師弟の関係が

生じたものと思われる。既に文安二年の「月千句」「雪千句」、宝徳四年の「宝徳千句」等一座、早くから中央連歌壇に活躍した。特に享徳二年の「小鴨千句」に一座、専順・心恵・賢盛等と交っており、この日晟を通して専順との交わりも生じた山名家または北畠家―日晟は伊勢国司北畠教具の被官でもあった―の武將道員が、この「何草」「何船」「朝何」が張行されるころには有力武將に成長していたものと考えられる。専順に並ぶ12・14という出句数はそのような立場にある道員への配慮ではなかったかと思われる。

栄阿

文明八年四月二十三日（一四七六）、宗祇の種玉庵において「何船」百韻が張行された。

発句 この葉の種や玉さくふかみ草 政長朝臣

連衆は前管領畠山政長朝臣5、宗祇55、杉原伊賀守賢盛6、その他同朋、時衆の徒、公家の有力武人など錚々たる作者に伍し、公方同朋栄阿は4句を詠じている。幕閣で僧体で雑事に従事した小役ではあったが、多くの影響力を示していたように思われる。彰考館本「種玉庵宗祇伝」に次の記事がみられる。

賢盛者源京兆之重臣而為世遭用、賢盛善愛二庵主_三有_三和漢聯句會_二宗勲_{武大膳}賢仲_{田大夫}栄阿性賀亦得_レ侍_レ之。…蓋追慕_三専順法眼之遺意_一也。

源京兆は將軍足利義政のこと、この記事から、賢盛・宗祇・専順・栄阿などの連歌作家としての人間関係、さらにその中における専順の重要な位置づけなどを知ることができる。栄阿一座の百韻はこの他に早くから

「何船」（康正元年閏四月以前）

発句 松風ハ梅かゝをひく調哉 元基

元基13 忍誓14 専順14 栄阿14 原春3 その他7人

「山何」（応仁二年一月二十八日―一四六八）

発句 花や星霜をふる木の宿の梅 桐（義政）

勝元、行助、専順、栄阿、賢盛他

「何木」（文明三年八月以前）

発句 行水のしらべも涼し玉の声 義政

義政18 政家11 賢盛15 能阿20 栄阿10 その他

このように早くから連歌壇に作家としての地位を得、賢盛とともに専順・宗祇などと幕府要人とのかわりを深くする役割をつとめていたものと思われる。

盛家

盛家は細川家の家臣で、安富民部丞のことで、一族の盛安・盛長とともに武將ながら連歌に秀れた才を見せている。その早いものでは「文安月千句」（文安二年八月十五日―一四四五）に、第六百韻「山何」に発句を詠んでいる。

発句 名にしおふやこひの月の都鳥 盛家

なおこの時の第一百韻の発句は宗砌、第三百韻の発句が専順であったことを考えると、当時の盛家の連歌作家としての地位を予想することができるわけである。その他の百韻は

姉小路今明神「朝何」（文安四年十月十八日―一四四七）、心恵11、

専順11に対して盛家3である。

「唐何」（文安五年五月十二日以前）

智蘊19 忍誓19 宗砌22 盛家12 他

「何人」（寛正三年一月二十五日―一四六二）

能阿10 賢盛9 盛家7 行助7 専順8 栄阿1 他

その他文明三年三月二十四日以前と考えられる「何船」では盛家10、「朝何」では盛家9で、いずれも専順と一座しており、細川家と専順とのつながりも予想される。

原春

原春一座の連歌で管見に入る最初なのは

「宝徳千句」（別名十花千句）（宝徳元年三月十二日―一四五二）で

第一発句宗砌、第二発句賢盛、第十発句忍誓の諸先輩に伍し、第四

「何鳥」

発句 明る夜は初花よりの梢哉 原春

を詠んでいる。その後宗祇が一座する最初の百韻法楽「何人」（康正三年八月十三日—一四五七）で 専順16 宗祇10 に並んで 原春10 を出句している。いずれも、伊勢国司家の垂水氏である日晟と同座していることから、その方面の武将とのかかわりが予想される作家である。

以上、「何草」を中心とし、「何船」「朝何」を主たる資料として、専順を中心とした連歌壇の動勢をさぐってみた。

注1 木藤才藏「御所本 ささめごと」解説 笠間書院

注2 金子金治郎「心敬の生活と作品」桜楓社

注3 前掲書

注4 前掲書

注5 岡見正雄「時宗と連歌師」〔日本古典文学大系〕月報35

藤原正義「宗祇—時宗（時衆）との間」〔日本文学〕33巻4号

注6 重松明久「朝倉氏と真宗」〔人物叢書〕附録第182号

注7 石川常彦「宗祇一座百韻二つの紹介」〔連歌俳諧研究〕6号

翻刻 京都女子大本 「何草」

世におほふ月のかつらの干枝哉 道員
四方の嵐そ木々に色つく 専順
晴くもりめくる時雨に秋ふけて 盛家
きりまの山にかへる鹿のね 源用
守人や今夜ハ田つらをわかつらん 堯清
野へなる里につくかよひち 成円
旅ころも都を跡にたちいて、 僧阿
関をこえてはいそかれそする 覚阿
鳥かなくいく夜むすひつ草枕 能阿

露をやとりの月のすゝしさ 重阿
夏草のたもとに風やこもるらん 忠珊
むかふはし／＼たける木のもと 心阿
しろたへの霞に山ハうつもれて 栄阿
雪ふりミゆる野ハくれにけり 原春
袖さむき道のゆく手のとほき日に 久澄
みなミにくたる船の河なミ 員
雲まよりうらめつらしき雁なきて 栄
そよく葛葉におつるむら雨 堯
松風や岡辺の露をはらふらん 順

家員堯能榮順家重用源能員覺珊員用原能家順珊員源堯能家源能用

順員珊能堯用順心家能員用僧能順家能用心重員順能家用員堯順

夕ハ風のしつかにもなし
 あさ日影猶さえかへりふる霜に
 なくやひゝくかうくひすのこゑ
 くる春ハたれか家にも告つらん
 何のミよりの浪の卵の花
 露かゝる岩ほの散ハ且さきて
 かたふく松そねさしふりぬる
 人よなとむかしの種にかわるらん
 菩提のみにちたつねいかはや
 あけくれハ西に心をかけそへて
 またぬ間もなきはつ秋の月
 忘るなよ猶三日の夜の袖の露
 霧にあさたつ国のみやこへ
 竜田川あさせふミしるわたりして
 たかこゑならしうたふ一ふし
 しるしらすちまたにすゝむ夕まくれ
 たゝにハきかし松にふく風
 うらやまししつかにすめる峯の庵
 ふもとを宇治の里そふりぬる
 守わふる網代の床に種をいて
 氷魚のはまりハふかき河水
 長月の花とや菊ハにほふらん
 千とせの秋ををくる仙人

道員十三 専順十 堯清八
 久澄一 源用十 忠珊四
 能阿十五 盛家十一 覚阿三
 原春五 心阿三 源阿七

堯 員 僧 家 能 順 用 (マ) 堯 能 員 順 原 覚 堯 能 員 家 源 円 栄 用 家